

LITTERAE POPULI

北海道大学の今を伝える広報誌、リテラポプリ

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>



発行：北海道大学 総務企画部広報課
〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
Tel: 011-706-2902 Fax: 011-706-2092
E-mail: kouhou@jimu.hokudai.ac.jp





Litterae Populi

『リテラポプリ』は、北海道大学の“今”を伝える広報誌として、年2回発行しています。
題名の“Litterae Populi”はラテン語で「ボブラの手紙」を意味します。

目次

03 特集 育てる

- 04 附属図書館
- 10 広域複合災害研究センター
- 12 国際インターンシップ

14 特別座談会「先駆者と語る」

北海道大学ユニバーシティプロフェッサー / 名誉教授
鈴木 章

20 研究室訪問「研ぐ」

北海道大学大学院理学研究院
地球惑星科学部門 宇宙惑星科学分野 教授
高橋 幸弘

22 卒業生インタビュー「同窓異曲」

北海道テレビ放送株式会社
エグゼクティブディレクター
藤村 忠寿

24 アンバサダー・パートナー通信

26 歴史紹介「挑戦の140年」

28 トピックス

30 キャンパス風景

リテラポプリ 64号 2020年3月発行

編集／リテラポプリ企画編集チーム

- 寒川 美奈（保健科学研究院）
- 黒岩 麻里（理学研究院）
- 菅原 広剛（情報科学研究院）
- 山本 学（情報科学研究院）
- 富成 絢子（メディア・コミュニケーション研究院）
- 井上 高聡（大学図書館）
- 富塚 直樹（広報課）

カバーフォト／山本 顕史（ハレバレシャシン）

写真／寺島 博美（コトハ写）

制作協力／佐藤 守功（佐藤守功デザイン事務所）

印刷／株式会社アイワード

表紙撮影場所／古河講堂

特集

育てる

2026年に創基150年を迎える北海道大学。札幌農学校開校以来の基本理念を受け継ぎ、長い歴史の中で、世界で活躍する人材を数多く輩出してきた。

特集では「育てる」をテーマに、教育・研究・地域貢献という大学の使命を果たすべく行われている3つの取り組みを紹介する。



知の交流と創成の拠点

本館4階の閲覧室。

知が集積する附属図書館。

学生への学習支援、本学の研究成果の保存・発信、一般市民への生涯学習支援など、
知の交流・創成の場としての役割を担っている。

附属図書館

特集

育てる

nurture

1

— 人間知 —

年度は322名が参加、これまでに100万語を読破した学生は36名とのことだ。本館、北図書館、水産学部図書室には英語多読教材コーナーを設置し、学生がいつでも気軽に英語多読を始められる環境を用意している。

情報リテラシー教育にも力を入れている。学部1年生を対象とした授業「図書館情報入門」や、学部3年生・修士1年生向けの文献収集セミナーなど、情報収集スキル向上を図るための教育を展開している。

さらに、学生相談総合センターのアクセシビリティ支援室と連携し、視覚障害や肢体不自由などで本を読みづらい学生の「読む権利」を保障するため、図書資料の電子化にも積極的に取り組んでおり、2018年度末までに約4000点の電子化を行っている。

こうした教育学習支援活動は、大学教育で重視されているアクティブ・ラーニングの支援にもつながり、学生が自ら調べることで学修を進め、レポートや論文を作成するといった過程を自律的に行えるよう、手助けをするものである。本館にはオープンエリアやメディアコート、北図書館にはアクティブラーニングフロアやグローバルフロアを設けるなど、学生同士のディスカッションや共同作業が可能な環境も整えている。教室での授業と相互に補完し合いながら、自ら学び課題解決に取り組むことのできる学生の育成を支援している。

知の共有

大学の教育研究活動の成果を保存し、社会に向けて広く発信す



北図書館3階のグローバルフロアで自習する学生達。



カラフトナヨロ惣乙名文書（ヤエンコロアイヌ文書）（レプリカ）。附属図書館HP「北方資料データベース」でも閲覧可能。



本館の北方資料閲覧室。北海道の命名者 松浦武四郎の著作物などが展示されている。

ることも図書館の重要な役割だ。2006年から運用を始めた北海道大学学術成果コレクション「HUSCAP (Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers)」。

本学の研究者や大学院生等が著した学術論文等をWeb上で公開しており、誰でも閲覧することができ。収録文献数は約6万3千件、累計ダウンロード数は約

7千800万件にのぼる。「オープンサイエンスとして知を共有することで社会全体の知の水準が高まり、そこからイノベーションが起こることを考えると、図書館の知の拠点としての役割、知の蓄積と創造を支援する役割は、今後さらに重要になると確信しています」と、附属図書館長の長谷川晃理事・副学長は語る。

また、国立情報学研究所と共同

1876年、札幌農学校の開校と同時に設けられたのが蔵書数6149冊の書籍室。北海道大学附属図書館の歩みはここから始まった。初代館長は新渡戸稲造。1903年には瓦葺き白亜の図書館（現在は国の登録有形文化財）が新築され、1965年に現在の図書館本館が完成するまで使用されることになる。1969年には教養分館（現北図書館）が新築された。

「北海道大学附属図書館」と改称されたのは戦後の1947年。現在の附属図書館は、札幌キャンパス正門近くにある「本館」、高等教育推進機構近くにある「北図書館」、各学部や研究院、研究センターなどにある16の部局図書室を管轄し、総蔵書数約378万冊、電子書籍・電子ジャーナルタイトル数約5万5千点を有している。

本学の4つの基本理念「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」に基づき、教育学習支援や研究支援を充実させながら、社会貢献や国際化を進めることを使命としている附属図書館。大学生の本離れが囁かれ、情報化社会やIT化が進む中、その使命を果たすべく様々な取り組みを行っている。

「英語多読マラソン」は、学生に英語を楽しく学習してもらおうという企画である。参加者は英語100万語読破を目指し、各自のペースで英語の本を読み、システム上で本のタイトルや語数などを記録する。読んだ語数の累積グラフや自分の順位が一目でわかり、モチベーションアップにもつながるという。2013年度に開始されて以降、参加者は累計1780名にのぼり、2019

大学図書館としての重要な役割の一つが教育学習支援だ。学内の他部署とも連携しながら、様々な企画やセミナーを行っている。

学生の修学支援や進路相談を行っているラーニングサポート室との協働により開催しているのが「アカデミックスキルセミナー」。

学部生向けにセミナーや補講を行っている。その中でも、新入生向けに授業の受け方やレポートの書き方を教える「スタディ・スキルセミナー」は、2018年度34回開催され、520名の学生が参加した。

学生を育てる

みを行っている。



本館地下にある自動化書庫収納ステーション。
約30万冊もの本が保管されている。

地域社会に向けた知の発信は、資料展示に限ったものではない。附属図書館は、広く一般市民を対象とした様々なイベントを開催している。2018年8月には、

地域社会と共に

地域社会に向けた知の発信は、資料展示に限ったものではない。附属図書館は、広く一般市民を対象とした様々なイベントを開催している。2018年8月には、

現在マサチューセッツ工科大学のメディアラボ副所長であり、北大工学部出身でもある石井裕教授を招き「デジタルアーカイブが紡ぐ未来…MIT石井裕教授と考える未来記憶」というワークショップを開いた。ワークショップでは石井教授の講演とともに附属図書館、総合博物館、大学図書館のデジタルアーカイブの取り組みを紹介した。また、同年9月にはアメリカ文学研究家、翻訳家として有名な柴田元幸東京大学名誉教授によるトークライブ「アメリカ文学2000年の魅力」を催し、J・D・サリンジャーやマーク・トウェインらの作品の解説などを通してアメリカ文学の

の意欲的な調査・研究活動の支援をより充実させていきたい、と意気込みを語る。

さらに、附属図書館は現在、国立大学図書館協会に設置されているオープンアクセス委員会の委員長を務めており、大学図書館によるオープンサイエンス、オープンアクセスの進展において先導的な役割を果たすことが期待されている。

附属図書館が目指すもの

情報のデジタル化とネットワークによる共有が進展し、附属図書館が扱う学術資料も、図書や雑誌などの紙メディアから電子書籍・電子ジャーナル・デジタルアーカイブ・研究データへと拡大している。附属図書館は、これらの変化を踏まえ、多様な資料の管理と提供を行うことで、人材の育成や学問の進展に寄与する知の基盤であり続けようとしている。「この知の基盤を保持しつつ、本学教職員や学生、そして地域の方々に図書館の魅力伝えていきたい」と話す長谷川理事・副学長。「とにかく図書館を利用して楽しんでほしい」と続ける。



北図書館3階にあるレーン文庫。
旧北海道帝国大学時代から英語を教えていたレーン先生の蔵書が並んでいる。

で、大学の研究データを管理・公開できるシステムの構築を試みているという。「新しいオープンサイエンスとして、図書館が果たすべき知の機能の発展に貢献するもので、まさに北大図書館の進取の気風を表しています」と長谷川理事・副学長。今後の展開が楽しみだ。充実した教育研究支援を行うためには、先進的な図書館との交流を進めるなど、図書館職員自身が専門性を磨く必要がある。札幌農

学校の開校以来つながりのあるマサチューセッツ大学アマースト校とは、図書館同士の交流協定を結び職員交流事業を行っている。2015年には附属図書館の職員派遣、2017年にはアマースト校図書館からの職員招聘が行われた。長谷川理事・副学長は、研究者と職員の垣根を超え、海外の大学図書館の先進事例調査や研究助成金獲得を目指したプロジェクトの立ち上げなど、図書館職員

の意欲的な調査・研究活動の支援をより充実させていきたい、と意気込みを語る。

北大のアイデンティティ
附属図書館は、札幌農学校開校から現在までの140年余りで蓄積された北方資料や、北海道の歴史を物語る価値ある数々のコレクションを有している。テレビ番組や出版物への資料提供も数多く行ってきた。コレクションの中には、2019年7月に国の重要文化財に指定された『カラフトナヨロ惣乙名文書（ヤエンコロアイ



本館入口前。本館は通常、平日は22時、土日祝日は19時まで開館している。



本館にあるメディアコート。
この開放感のある空間は、学生にとってくつろぎの場所になっている。

ヌ文書』、北海道指定有形文化財の『新琴似村屯田兵村記録』、明治期の北海道に関する写真や図文書等が多数あり、館内のほか、総合博物館や大学文書館などでも展示を行っている。さらに、これら資料のデジタルアーカイブ化も進めている。

「こうした資料は大学文書館の資料とともに北大のアイデンティティの基盤なのです。附属図書館にはそれを支える役割があるので」と長谷川理事・副学長は強調する。

もし雪深い地域のライフラインが地震で寸断されたら、もし火山の噴火による火砕流で川がせき止められ水害まで起こったら…。そんなとき災害地域の救援活動と生活の再建にはどのように取り組めばよいだろうか。複合災害の防災・減災研究拠点として、広域複合災害研究センターがその活動を開始した。

特集
育てる
nurture
2
— 地域連携 —

広域複合災害研究センター 地域とともに 立ち向かう 広域複合災害の脅威に

時に台風、豪雨、豪雪、地震、津波、噴火など複数の自然災害が続けて起こることや、それらが原因となって山崩れ、地すべり、土地の液状化、水害、施設破壊、交通障害など二次的な災害が引き起こされることもある。このように、自然災害が複合し、広域にわたって人命や財産の損失、物流や経済への多大なダメージをもたらす災害を広域複合災害という。例えば、2016年8月には1週間に3個もの台風が北海道に上陸し、河川の氾濫により農地の冠水を引き起こした。また、1952年3月の十勝沖地震では、津波によって運ばれてきた流水が家屋を倒壊させた。

こうした広域複合災害に対す

る防災と減災の方策を探るために、農学研究院の寄附講座「国土保全学研究室」を前身として、2019年4月に広域複合災害研究センターが設置された。センター長を務める山田孝教授を筆頭に、専任教員3名、工学、農学、理学、文学の各研究院や北極域研究センターに本籍を置く教員の総勢26名が集い、研究開発、防災教育、自治体への専門的助言などにあたっている。

広域複合災害では、災害による直接的な被害に加え、社会インフラの崩壊、物流の阻害に伴う経済の停滞、被災地域の人口流出など、社会的な問題も引き起こされる。その影響は被災地に留まらず、被災地の産業が関わるサプライ・

チェーンを通じて全国へ、さらには世界へと波及する恐れがある。そのため、研究対象には災害発生メカニズムの解明や防災技術の開発のほか、公共政策や経済など、学問的に多くの分野が関係する。こういった各分野における研究者を有し、実践的な防災・減災対策を対外的に提供できることは、総合大学である本学ならではの強みだ。学内では大学院共通授業科目として、国土保全学総論と突発災害危機管理論を開講。専門分野の異なるセンター教員が持ち回りで、多面的なアプローチを特徴とした講義を行っている。また、学外では北海道胆振東部地震を振り返り、今後の減災・復興を考えるシンポジウムや現地見学会を開催するなど、自治体と連携したアウトリーチを展開している。

北海道における 自然災害への備え

自然災害は、全国的に激甚化する傾向にあるという。北海道は比較的大規模災害が少ない方であったため、豪雨などの経験が少なく対策が手つかずの部分も多い。ハザードマップの整備といった平時

の活動から、災害直後の緊急救助への即応準備や、復旧・復興支援のための長期的ビジョンに基づく計画まで、防災・減災のための備えが求められる。全国各地の大学等で防災に関する取り組みが行われているが、北海道ではその広さや寒冷地であるといった点が災害対策を考える上での重要な要素となる。北海道の広さは農業など主要産業にとって利点である反面、救援の起点となる近隣都市や港湾から被災地までの交通アクセスの確保や、距離の克服は重要な課題だ。また、全国的に見ても先鋭化している高齢化・過疎化といった問題も考慮する必要がある。さらに、災害発生

時に救援があるまで地域住民の共助力が必要とされるが、その維持も課題の一つである。

「まず敵を知ることからです」と山田センター長は語る。複数の災害が続いて起こった時にどんな困難が生じるか、想定される組み合わせは、地域の地形・地勢や季節によっても実に多様だ。「これだけ組み合わせがあると防災は容易ではありません」と山田センター長。まずは減災の方策を探るのが現実的だという。2019年9月には北海道内全市町村を対象としたアンケートを実施。自治体において想定される各種災害のハザードや本学に期待することなど、分析が進められている。

地域とともに

防災・減災のための対策立案とその周知や実施には、自治体等行政機関、民間企業、地域住民、マスメディアなどとの連携が重要だ。平時の活動としては、札幌市のハザードマップ見直しのために専門家を紹介するなど、相談窓口の役割を果たしている同センター。いざ複合災害が起こった時には、自治体に科学的・技術的な観点から助言を行うため、専門知識を持ったセンター教員をチームとして派遣する体制も整いつつある。また、災害時には全容把握のための情報収集も必要となるが、山がちな地域ではアクセスも容易

ではないため、人工衛星やドローンでいち早く被害規模を知るための技術開発も行っている。

「地元が真に求めるニーズを把握し、そのニーズに応える形でセンターの存在感を示していきたい」と話す山田センター長。関係行政機関と連携して北海道の「広域複合災害減災計画ガイドライン」を作成することが、同センターの大きな目標だ。さらにその先には、汎用モデルを構築し、海外へ防災パッケージとして輸出する構想もある。成果のアウトリーチを目指し、地域の行政・住民との連携の芽が日々育っている。



専任の厚井高志准教授が作成したセンターのロゴマーク。山間部の降水・風雪、地震波形（上部）と、河川の蛇行、海の波浪（下部）、居住空間＝家屋（CNHRロゴの四角囲みと上部の三角形（屋根））、外縁部は北海道の雪山、さらに背景が黒なのは宇宙（衛星からの監視）を表している。



崩壊土砂の流動状況について住民に説明する山田センター長（厚真町との共催による『「平成30年北海道胆振東部地震を振り返り、今後の減災・復興を考える」シンポジウム&現地見学会』）。



災害調査・研究に使用しているUAV：DJI社 Phantom 4 RTK。基地局とリアルタイムで通信することで、位置情報を持った航空写真データが取得でき、高精度の地形データ作成が可能。

2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震による山腹崩壊（勇払郡厚真町、2019年8月20日撮影）。



国際インターンシップ「成果報告会」での発表。本学教職員・学生に加え、協力企業の方々や高校生など200名程度が参加した。

1月から4月までの間、2回に分けて学生を募集し説明会を開催する。そこで、派遣先、派遣期間、研修内容、募集条件、費用負担などについて説明を行い、参加希望者からの申込みを受け付ける。その後、書類審査と面接審査を経て派遣先とのマッチングを行う。2016年度は新渡戸カレッジ生に限定して募集を行っていたが、2017年度からは対象学生の全学生に門戸を広げている。「新渡戸カレッジ生に限らず北大には優秀な学生がたくさんいますので、みなさんにこのプログラムに挑戦する機会を与えたいです」と語る山口副学長。また、これまで海外拠点はアジア諸国のみであったが、2019年度からはフィンランド、ハンガリー、オーストラリア、カナダも加わり、まさに世界規模で全12学部に対応する多様なプログラムが展開されている。

海外研修前の5月から7月の間は、研修にあたっての心構えや企業研究、研修中のマナーや地域研究、安全教育な



加工した製品の品質検査をしている様子（タイ・シンフォニアテクノロジー株式会社）。

海外研修は、「課題設定・解決提案型」、「視察・活動体験及び課題発見型」、「製造現場提供型」等のパターンを軸とし、実際の企業活動に基づいたプログラムが提供される。教職員は同行しない。言語や文化など異なる環境下で、これまで培ってきた問題解決能力や自己管理能力が試される。まさに

海外研修後には成果報告会を開催し、それぞれの学びや就業体験について報告する。その中には、「海外でのインターンシップを走りきったことは自分自身にとって大きな自信になった」、「今後の人生を考える上で非常に得がたい経験をした」という声が多く聞かれた。日常とは全く異なる環境を生き抜くからこそ、やり遂げた時の達成感は大い。

さらなる高みを目指して

試行錯誤を重ねながら発展してきた本プログラムであるが、運営面での課題も明らかになってきている。1つは学生のリスクマネジメント。特に海外ネットワークの希薄な地域での管理体制は大きな課題だ。「安全面の配慮、実際に何かが起こった時にどのような対処するかということ」は、常に問題意識として抱えています」と話す井上客員教授。時々刻々と変わる国際情勢を踏まえ、機動的なサポート体制の強化が求められる。

また、学生の経済負担軽減

減も課題の1つだ。現状、参加学生全員が北海道大学校友会エルムからの奨学金支援を受けられることに加え、要件を満たせばその他の奨学金や旅費支援を受けられるが、渡航期間や渡航地域によっては多額の経済負担を強いることになるため、より充実した財政的支援が必要だ。

「解決すべき課題はまだありますが、国際インターンシップは間違いなく北大の看板となる教育プログラムです。学生はこのプログラムをうまく利用して、自分を高めてほしいですね」と山口副学長。同窓生のつながりを核として発展を遂げてきた本プログラムは、世界をフィールドに活躍できる人材を育成している。

ログラムを担当する山口淳二副学長は語る。主として新規の受入企業等の開拓を担う井上修平客員教授をはじめ、多くの同窓生の協力により、カスタムメイドのプログラムが構築されてきた。学生一人一人、異なる国や企業に適した企画を作ることは非常に大変であるが、そのノウハウは蓄積され、大学と同窓生の有機的なつながりも根付いてきているという。

進化する「修行」プログラム

1月から4月までの間、2回に分けて学生を募集し説明会を開催する。そこで、派遣先、派遣期間、研修内容、募集条件、費用負担などについて説明を行い、参加希望者からの申込みを受け付ける。その後、書類審査と面接審査を経て派遣先とのマッチングを行う。2016年度は新渡戸カレッジ生に限定して募集を行っていたが、2017年度からは対象学生の全学生に門戸を広げている。「新渡戸カレッジ生に限らず北大には優秀な学生がたくさんいますので、みなさんにこのプログラムに挑戦する機会を与えたいです」と語る山口副学長。また、これまで海外拠点はアジア諸国のみであったが、2019年度からはフィンランド、ハンガリー、オーストラリア、カナダも加わり、まさに世界規模で全12学部に対応する多様なプログラムが展開されている。



国際インターンシップ「成果報告会」後に撮影した集合写真。

特集
育てる
nurture
3
ー グローバル人材 ー

国際インターンシップ 画期的かつ実践的な キャリア教育の展開

学生の海外派遣とインターンシップという2つの要素を併せ持つ「二兎を追う」試みとして誕生したカスタムメイドの教育プログラム。同窓生ネットワークを最大限活用することにより発展を続け、世界で活躍できる人材を育成している。

2016年、本学と北海道大学連合同窓会（北海道大学校友会エールの前身）との意見交換を契機とした新たな教育プログラムが誕生した。学生が企業等の海外拠点を訪れ、数週間のインターンシップを行う「国際インターンシップ」である。このプログラムは、学生が自らの専門分野や進路に関連した就業体験を通して高い職業意識を培うとともに、異なる社会や文化の中で国際性とリーダーシップ力を醸成することを目的としている。学部2・3年生、大学院修士課程の学生を対象に、夏季休業期間を利用して海外拠点で2〜6週間の研修を行う。初年度の2016年度は4名（3カ国・3拠点）であったのが、2017年度は19名（7カ国・14拠点）、2018年度は50名（10カ国・39拠点）、そして2019年度は73名（14カ国・49拠点）と、参加学

生は着実に増加している。また、海外拠点の業種も、製造業、卸売業・小売業、情報・コンサルティング、流通・金融・商社など多岐にわたっている。

同窓生による支援

プログラムの実施にあたり、重要な役割を担うのが同窓生だ。「受入先企業等の多くは同窓生が経営トップである世界的企業等であり、同窓生同士のつながりがプログラムを支えています。近年では、同窓生が有するネットワークにより、さらなるプログラムの拡大・充実が図られています。また、受入先企業等の開拓のみならず、受入先と学生のマッチングや学生指導などにも同窓生が関与しています。このように、本プログラムは同窓生の絶大な協力があってこそ成り立っているのです」と、プ



施工区域周辺で環境測定をしている様子（カンボジア・株式会社大林組）。

先駆者と
語る

ゲスト

鈴木章氏

北海道大学 ユニバーシティプロフェッサー／名誉教授

鈴木章ユニバーシティプロフェッサーがノーベル化学賞を受賞してから早10年。この間も本学は、知の創成・伝承・実証の拠点として世界の課題解決に貢献すべく、大学改革を着実に進めている。この改革を先導する本学の研究者達が、現在も国内外で精力的に講演活動をされている鈴木章ユニバーシティプロフェッサーを囲み、本学の現在と未来について語り合った。



特別座談会

北海道大学の可能性を探る



北海道大学大学院工学研究院教授

伊藤 肇

ITO Hajime

博士（工学）。専門は有機化学。京都大学工学部卒業。同大学大学院工学研究科博士課程修了後、筑波大学助手、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助手を経て、2002年に北海道大学大学院理学研究科助教授に着任。2010年から現職。化学反応創成研究拠点（ICReDD）副拠点長を務め、世界トップレベルの研究を進めている。

黒岩 本日は、大学の使命である教育、研究、地域貢献をテーマに進行させていただきます。どうぞよろしく願います。

進む国際化教育

黒岩 まずは「教育」についてです。国際化が加速するなか、本学でも様々な教育プログラムを展開しています。ラフエイ先生は総長補佐として国際的な教育に携わっていますが、普段はどのような授業を担当していますか。

ラフエイ 留学生と日本人学生が、一緒に英語で授業を受ける国際交流科目を担当しています。授業の中で行うグループディスカッションでは、文化や考え方の

違いから、様々な意見が交わされます。

鈴木 それは留学生、日本人学生の双方にとって、自身の教養を高めるためには、非常に重要なことです。

ラフエイ 「新渡戸カレッジ」というプログラムも、とても魅力的です。

鈴木 それはどのようなもの？

ラフエイ 本学で実施されている学部横断型の教育プログラムです。海外留学への挑戦や国際経験豊かな卒業生との対話などを通じて、グローバル社会で真のリーダーとして活躍できる能力の習得を目指しています。

鈴木 とても面白そうですね。私も若かったらぜひ入りたい。

高岡 本心に素晴らしいプログ



ものを見出していくかが重要になっています。

伊藤 共同研究やダイバーシティがとても重要ですね。

高岡 そのとおりです。分野融合研究がとても大事。その点、本学は優位ですよ。ひとつのキャンパスにほとんど全ての部局が集まっていますので、融合研究

ラムですよ。本学が掲げる「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」の基本理念を全て新渡戸カレッジで学ぶことができます。北大学生全員が受講できるカリキュラムにしても良いぐらいです。

ラフエイ 横断的にいろいろな学部

の学生が参加してグループ学習を行うので、枠にとらわれない議論ができます。

高岡 まさしく学部

の「クロスカップリング」ですね。

鈴木 私の時代から、日本人はシャイでしてね。真面目に勉強するし、とても熱心なのは非常に良いのですが、恥ずかしがって積極性に欠けるところがあります。決して世界で負けていないのに、もったいないですよ。

伊藤 私の研究室では、博士課程の大学院生を数ヶ月、海外に留学させます。英会話も不自由なくできるようになりますし、多様な経験を積むことができます。

鈴木 そういうチャンスを作ってあげるといことは、学生にとって非常に良いことですね。

伊藤 とても残念に思うことは、多くの学生が就職活動の成功を

目標にして大学生活を送ってしまふことです。

鈴木 それは昔からありますね。

伊藤 私の嫌いな言葉が「コストパフォーマンス」。できるだけ少ない授業をとり、できるだけ少ない点数を取る。長い人生

に良い点数を取る。長い人生を考えると、そういう考え方で大学生活を送るのはもったいないですよ。大学には、人生を豊かにするような知識や出会いがたくさんあるので、そこに気付いてほしいです。

ラフエイ 「コストパフォーマンス」を意識し過ぎず、心にゆとりを持って大学生活を送ってほしいですね。

高岡 学生側にも問題はありますが、教員側にも工夫が必要ですが、いかに魅力的な大学生活を

ジェンダーは私の専門ではないので、文系の先生達と大学院共通講義を行っています。将来的に、文理融合研究を展開するのが目標です。本学なら、実現できるかもしれません。

高岡 グローバリゼーションも必要ですけど、ローカリゼーションもとても重要。基盤をしっかりと固めた上で、世界に踏み出す必要があると思います。

伊藤 別の分野の先生と親しくお話することでその影響を受け、また新しい発想を得る。まだ埋まっている宝物が見つかる可能性もありますね。

鈴木 僕はアメリカに2年と少しいましたが、ノーベル賞を受賞した研究は100%北大で行ったものです。理学部で学生と



北海道大学大学院文学研究院准教授

ラフエイ ミシェル

La Fay Michelle

博士（文学）。専門は宗教学。マクファーソン大学（アメリカ）卒業。北海道大学大学院文学研究科博士課程修了。北海道教育大学准教授を経て、2014年に北海道大学大学院文学研究科（現文学研究院）特任准教授に着任。2016年から現職。総長補佐（国際連携機構担当）として、大学の国際化を推し進めている。

送れるか、その環境を提供していかなければならない。

鈴木 おおらかな気持ちを持つことが豊かな創造性を育むことにつながります。学生にはそのような気持ちで、大学の教育プログラムをうまく活用して自身を高めてほしいですね。

分野融合の時代へ

黒岩 次のテーマ「研究」に移らせていただきます。本学が進める世界トップレベルの研究の一つとして、伊藤先生が副拠点長を務めるICReDD*（化学反応創成拠点）がありますので、この事業についてお話いただけますか。

伊藤 WPI*（文部科学省国際

して9年間過ごしてから教員になり、北大から大きな恩恵を受けました。日本国内だけではなく、国際的にも認められ、世界に貢献できるような大学になっ

てほしいですね。

高岡 先生のご功績を見て、学生や研究者もかなり刺激を受けていると思います。

鈴木 それは私も非常に嬉しい。ノーベル賞をもらう可能性は、みんなに平等にあると思います。北大には優秀な研究者や学生がいて、さらには分野融合型研究を進めるための環境が整っていますので、自分が初めてやったんだというオリジナリティーのある研究をぜひ展開してほしいですね。



北海道大学遺伝子病制御研究所教授

高岡 晃教

TAKAOKA Akinori

博士（医学）。専門は免疫学。札幌医科大学医学部卒業。同大学大学院医学研究科博士課程を修了。東京大学助手、講師を経て、2007年に北海道大学遺伝子病制御研究所教授に着任（現職）。2012年から4年間、同研究所長を務める。幼稚園への出張講義「まもるんじやー」など、積極的な社会貢献活動に取り組んでいる。

黒岩 私は生物の性がどのように決まるのか、そのメカニズムを研究しています。ヒトは他の生物と異なり、性とジェンダーが密接に関係しています。でも



北海道大学大学院理学研究院教授

黒岩 麻里

KUROIWA Asato

博士（農学）。専門は生物科学。名古屋大学農学部卒業。同大学大学院生命農学研究科博士課程修了後、日本学術振興会特別研究員を経て、2003年に北海道大学先端科学技術共同研究センター講師に着任。2016年から現職。総長補佐（広報室担当）として、大学の広報活動を推進している。

大学の存在意義

黒岩 次のテーマ「地域貢献」に移らせていただきます。非常にユニークな活動をされている高岡先生からお話しを伺いたいと思います。

高岡 私は幼稚園や保育園への出前講義を行っています。そのきっかけは、2015年にOECD^{*3}（経済協力開発機構）が進めているPISA^{*4}と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査報告を偶然見たことです。

PISAでは高校1年生を対象に読解力、数学的リテラシー、

科学的リテラシーの三分野の学力について、3年ごとに調査しています。この時、日本はダントツで1位でした。

黒岩 日本の高校生は、サイエンスへの理解は良いわけですね。

高岡 しかし残念なことに、サイエンスを面白いと思うか、という調査では、調査対象は70カ国程あるのですが、下から数えて7番目くらいでした。

鈴木 本当たったら面白いと思うはずなのにね。

高岡 まさしく今の受験の詰め込み勉強の影響です。受験に対応するために、面白くなくても

先駆者と

語る

とにかく覚えるという高校生が多いと思います。

そこで、記憶が残り、かつ脳の可塑性が高い4歳の頃に、インパクトのある面白いサイエンスを教えてあげるのが良いと思います、出前講義を始めました。「若手人材育成」ならぬ「超若手人



恵まれた環境を活かし、オリジナリティーを追求することが大切です。



北海道大学ユニバーシティプロフェッサー／名誉教授

鈴木 章

SUZUKI Akira

理学博士。北海道大学理学部卒業。同大学大学院理学研究科博士課程修了。1959年に北海道大学理学部助手、その後同大学工学部助教授を経て、1973年に同大学工学部教授に就任。1994年に北海道大学を退官後も、国内外での講演活動を精力的に行っている。

パラジウム触媒と塩基を用いた、有機物同士を結合させるための化学反応「鈴木クロスカップリング」(1979年)の研究で、2010年にノーベル化学賞を受賞。「鈴木カップリング」は、医薬や農業、IT機器に不可欠な液晶、有機ELなど、私達の生活に身近な製品の開発や量産化に大きな貢献を果たしている。

材育成」ですね。

鈴木 子ども達は興味を持ってくれますか？

高岡 すごくですよ。飛びついてきます。まだ字が読めないのに70枚程のスライドを見せるのですが、目をキラキラさせながら楽しんでくれます。

鈴木 それは効果的ですね。

高岡 地域の中でどれだけ社会貢献ができるか、大学の存在意義のひとつでもありますよね。質の高い教育や研究を実際に行っている大学教員が、子ども達の教育にも携わることが重要だと私は思います。

た時に「Organic Chemistry(有機化学)」という本に出会い、化学の道へ進むことにしました。ラフエイ 知っています。とても分厚い本ですよ。

鈴木 アメリカではとても有名な本で、学生はみんなこの本を読んで勉強していました。

それから、北大の教員になってからのことですが、書店で「Hydroboration(ヒドロホウ素化)」という本を発見しました。ホウ素に他の有機分子を結合させたものを有機ホウ素化合物と呼ぶのですが、この化合物の作り方について書かれた本でした。読んでみると、とても面白くてね。徹夜して読みました。私の人生で唯一、徹夜して読んだという記憶のある本です。

そして、この本の著者であるブラウン先生の元で研究をすることを決め、パデュー大学(米国インディアナ州)へ留学しました。この二冊の本に出会わなかったら化学の道へも進んでいなかったし、ノーベル賞もなかったですね。

黒岩 素敵な出会いですね。一冊の本から海外での研究を始めるとい行動力はさすがです。

学する学生が現れると良いですね。

二冊の本との出会い

黒岩 鈴木先生はどのような子どもでしたか。

黒岩 私も出前授業や研究室訪問で高校生や中学生に教えることはありますが、幼稚園児や保育園児はないですね。とても新しい試みだと感じます。

鈴木 非常に面白い取組ですね。これをきっかけにして、北大に入

伊藤 オリジナリティーを追求する強い意思のあらわれですね。

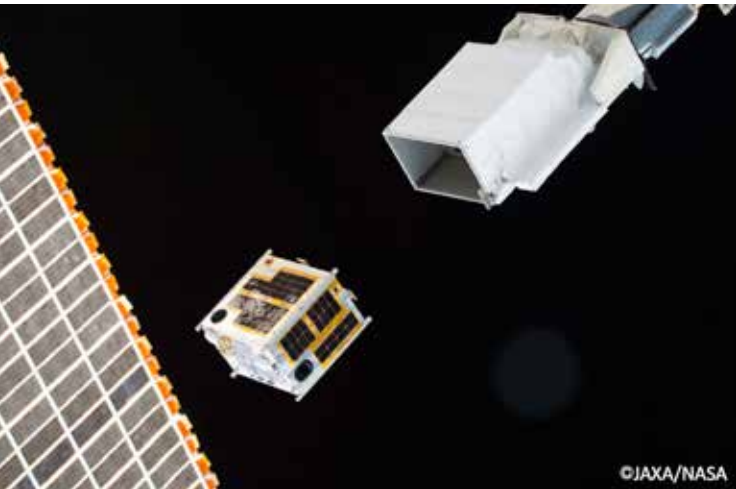
鈴木 どのようにしてオリジナリティーを追求するかを決めるのは自分ですから。

黒岩 最後に、学生に向けてコメントをいただけますか。

鈴木 僕が学生の頃は、海外に留学しないと外国人と話す機会はなかったのですが、今では留学生とコミュニケーションをとる機会が多いですね。せっかくの大学生活なので、人との出会いを大切に、いろいろな経験をしてほしいです。

黒岩 本日はありがとうございます。

^{*1} Institute for Chemical Reaction Design and Discovery の略称
^{*2} World Premier International Research Center Initiative の略称
^{*3} Organisation for Economic Co-operation and Development の略称
^{*4} Programme for International Student Assessment の略称



北大が東北大とともに開発したフィリピンの第1号超小型衛星
DIWATA-1が、国際宇宙ステーションから放出された瞬間

「地球惑星科学」を
研ぐ

電磁波を空間に放つ現象（放射）が生じる場合もある。探索すべき対象物から反射または放射される電磁波の特性は、対象物の状態や、対象物を構成する物質の種類などに依存する。このため、人工衛星や航空機、車両などに搭載されたセンサーを用いて、対象物から反射あるいは放射された電磁波を受信し、その特性を解析することによって対象物の形状や性質などを把握することができる。

リモートセンシングは広範な分野において応用可能であるが、とりわけ重要な応用例として挙げられるのが、「各種の地球環境を観測すること」であろう。地表面か

ら反射、あるいは放射された電磁波を受信・解析することによって、例えば海水温や森林面積などを定期的に観測し、地球温暖化の進行状況を把握することも可能だ。このような特徴を持つリモートセンシングに着目し、世界最先端のスペクトル計測技術を活用することで、リモートセンシングによる農作物の生育診断や病害虫診断技術の開発などに取り組んでいるのが、理学研究院の高橋幸弘教授である。

「学習マンガを読んだことをきっかけに、天文学に興味を持つようになりました。天文学者になろうと決めたのは小学校3年生の時です」と話す高橋教授。千葉県内の高校を経て、東北大学に入学。「中学生の時に東北大学へ入学しようと決心しました。入学後、オーロラの研究に興味を持ち、地球物理学の研究室を選択しました。その後、同大学の大学院博士課程に進学し、南極地域観測隊の越冬隊員として、南極の昭和基地に1年間滞在。そこでオーロラの観測を行い、そのデータに基づいて学位論文を執筆

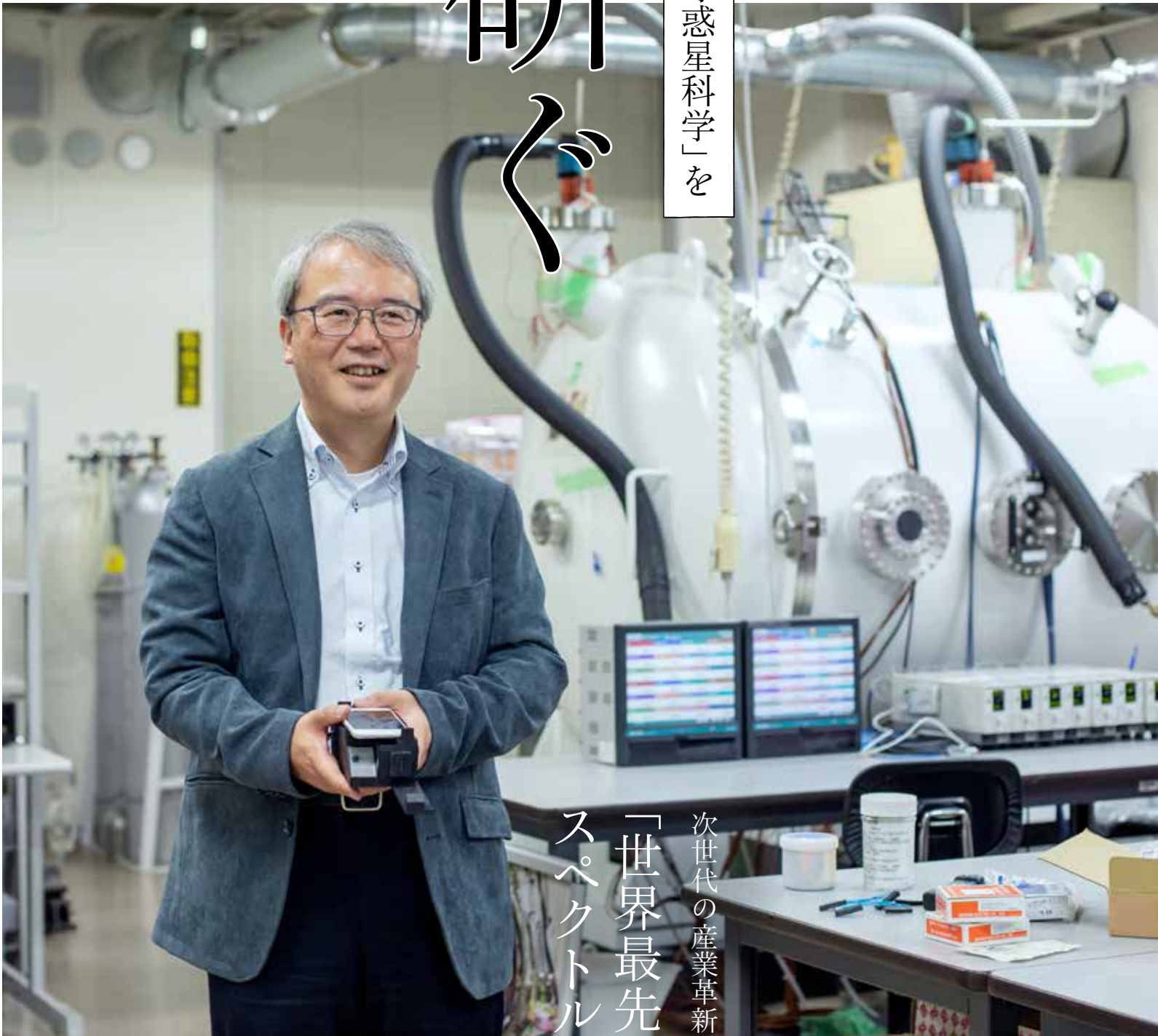
したのだそうだ。さらにその後、東北大学の教員となった高橋教授は、リモートセンシングの分野に関わるきっかけとなった研究チームに出会った。それは「スプライト」という現象である。「雷というのは雲と地上との間に発生する放電現象ですが、それにはば同期する形で若干遅れて、雷の上空、高さは40キロメートルから90キロメートルくらいの間で発光が生じる、スプライトという現象があります。スプライトは雲の上に発生するわけですが、それを上空から人工衛星によって観測する試みを企画しました。」

スプライト観測のための人工衛星の開発に着手した高橋教授。「1号機での観測は失敗に終わったのですが、その後に打ち上げた2号機では様々な挑戦に成功しました。それらの中でも特筆すべき成果は、1ナノメートルの波長ステップ幅で電磁波（可視光線、近赤外線）を走査できるカメラ（センサー）を開発し、高精度スペクトル観測技術確立したこと。このようなカメラ自体は特に新しいものではありませんが、宇宙用としては世界初で、宇宙からスペクトルを計測するという意味では世界一の性能を持っていると思います」と話す。

革新的リモートセンシング事業の創成に向けて

2009年、本学理学研究院に赴任した高橋教授。「東北大学で同じ研究室に所属していた先生が北大に移られていたのですが、その先生から大型の惑星観測用望遠鏡を作るから応募しないかと声をかけていただいたことがきっかけで北大へ赴任しました」と当時のいきさつを語る。着任以来、高橋教授は、それまでの観測で培われた高精度スペクトル観測技術を活かしたプロジェクトにも積極的に取り組んできた。その一つが、文部科学省の「地域イノベーション・エコシステム形成プログラム」として採択された『北海道大学のスペクトル計測技術による「革新的リモートセンシング事業」の創成』だ。

このプロジェクトでは、携帯型の計測器やドローンを利用したスペクトル計測手法、世界随一の性能を誇る衛星搭載スペクトルカメラを組み合わせることで、超低コストでの精密スペクトル計測を実現する。また、これらを用いることで、日射角度とカメラ方向



世界最先端のスペクトル計測技術による
リモートセンシング

対象物の形状や性質などを、遠方から非接触で観測する技術を利用したリモートセンシング（遠隔探査）という。対象物に電磁波（可視光線や赤外線、マイクロ波など）が照射されると、その一部あるいは全てが跳ね返される現象（反射）が起きる。また、対象物そのものが

次世代の産業革新を導く
「世界最先端の
スペクトル
計測技術」

北海道大学大学院理学研究院
地球惑星科学部門 宇宙惑星科学分野

高橋 幸弘 教授
TAKAHASHI Yukihiko

博士（理学）。専門は地球惑星科学。東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程中退。東北大学大学院理学研究科助手、講師、准教授を経て2009年に北海道大学大学院理学研究院教授に着任（現職）。地球惑星科学を先導する研究者として、今後の更なる活躍が期待される。

憩う



愛猫とのひととき！

山梨県甲府市に自宅があり、本学には単身赴任しているという高橋教授。週末は自宅へ戻り、愛猫と触れ合うのがささやかな息抜きになっている。

自らの感覚を大切に「面白さ」を追求する 自由な学風と経験が生んだ「発想力」

卒業生インタビュー

同窓異曲



北海道テレビ放送株式会社
エグゼクティブディレクター

藤村 忠寿

FUJIMURA Tadahisa

法学部卒業

全国各地にファンを持つテレビ番組「水曜どうでしょう」を制作する藤村忠寿さん。ほかにDVD制作やドラマ演出など精力的な活動を続ける同氏に、仕事への想いや大学時代について伺った。

―愛知県出身とのことですが、どのような少年でしたか。

クラスをまとめることが好きで、小学生の頃は学級委員長などをしていました。特に自分たちでルールを作って遊ぶことが好きで率先してやっていました。子どもの頃の友人には、「やっていることは今も変わってないね」とよく言われます。

―中学、高校時代はどのような学校生活を送りましたか。

中学、高校とラグビーをしていました。体格や身体能力の異なる人間がチームを組み、集団でゲームをすることが楽しくて6年間続けました。バラエティーに富んだメンバーとの交流は何よりも面白かったです。

―北大法学部に進学した理由を教えてください。

小学生時代に祖父と2人で北海道旅行をしたときの広大な景色が忘れられなかったというのが大



藤村氏の編集室内。棚には収録テープが所狭しと並んでいる。

―北大を卒業してよかったなということはありませんか。

北大には、僕みたいな学生をあの広いキャンパスで野放しにしてくれたということに本当に感謝しています。全国各地から集まってきた多様な人とのつながりは一生の財産になっています。

―最後に後輩へのメッセージをお願いします。

自由な発想を大切にしてほしいと思います。この大学は「お前が普段からにじみでいるような自由な大学です。その自由さ、おらかさを受け継ぎ守りつつ、みんなでいろいろな意見を言い合い、学生生活を満喫してほしいですね。

きかったですね。さらに、北大の

「Boys be ambitious」「大志を抱け」という大きな目標にも共感し、北海道や北大に興味を持つようになりまし。また、市長や町長といった地方のまとめ役的な政治家になりたいと思い、法学部に進みました。

―大学生活で印象に残っていることは。

高校時代のラグビー部の先輩が北大に何人もいて「ラグビー部に入れよ」と言われ、入学式の翌日から練習に参加させられました。全国から集まって来た仲間とラグビーの練習をして、夜は北24条か北18条あたりでよくお酒を飲んでいました。結局留年してしまいました。人生で一番楽しい5年間でしたね。

―北海道テレビ放送（HTB）に入社した理由を聞かせて下さい。

HTBに入社していた北大ラグビー部の先輩から「暇ならアルバイトしないか」と誘われ、カメラ

マン助手として三脚を担いでいろいろな取材現場に行きました。そこで楽しそうな仕事だと思い、そのまま入社試験を受けました。考

えてみると、ラグビー部の先輩が僕の人生を全て決めているという感じですね。

―入社後について教えてください。

いろいろな現場に行けると思っていましたが、最初の配属先は東京支社の視聴率とお金の計算をする部署でした。社会人はつまらないと思っていましたが、東京はアウトドアをするにはすごく便利でしたので、キャンプ、山登り、カヌーなど、給料は全てアウトドアにつき込んでいました。後々「水曜どうでしょう」でいろいろな地方を旅することになりますが、この時の経験が活きていると思っています。

―「水曜どうでしょう」はどのように生まれたのですか。

働いて5年後に制作部へ異動して番組を任せられ、自分が一番面白い番組を作ろうと思って始めたのが「水曜どうでしょう」でした。旅でちょっとしたアクシデントがあると楽しいですよ。そこで番組でアクシデントが起こるような

旅をしてみようと思いました。でも、面白いことって生み出そうとして生み出せるものではなく、や

ってみて初めて何かが起こるものだと思います。そういう意味では、自分の感覚に素直になって現場で楽しんでいるに過ぎません。出演者の大泉洋（敬称略）には、「これはテレビ番組じゃないよね。自分たちの何かを撮っているだけだよ」と言われたのですが、まさにそのとおりかもしれません。



―出演者への想いを聞かせて下さい。

年齢もバラバラの4人が1つのチームを組み、誰かが書いたものを演じていたわけではなく、自分たちが楽しみたい場所に行き、自分たちの言葉と表情で面白さを作り出し、それが皆さんからの支持を得ました。彼らは引退のないゲームのチームメイトですね。

―監督を務めた「チャンネルはそのまま！」が昨年の日本民間放送

―これから取り組んでいきたいことについて教えてください。

つい先日、ある出版社の人に「小説を書いてみませんか」と言われ、書いてみようという気持ちになっています。将来的には、直木賞か芥川賞をとるような作品を3年かけて書きたいと思っています。

PROFILE

1965年愛知県出身。1990年に北海道大学法学部を卒業後、北海道テレビ放送株式会社（HTB）に入社。東京支社編成業務部での勤務を経て、1996年に本社制作部に異動し「水曜どうでしょう」を制作。その後手かけたドラマ「ミエルビ」（2009年）や「チャンネルはそのまま！」（2019年）など、ドラマ賞を受賞した作品は多数。現在は北海道大学公共政策学連携研究部・教育部のフェローとしても活躍中。

北海道大学と世界をつなぐ。

今号では、パレスチナとザンビア共和国において北海道大学パートナーとして活躍する
リーム・アブ=クメイル氏とウォルター・ムレヤ氏からの寄稿を紹介します。



ウォルター・ムレヤ氏

(ザンビア大学獣医学部講師、2017年2月北海道大学パートナー就任)

北海道大学のような名門大学の
“パートナー”に任命していただき
光栄です。

私はザンビアのカッパーベルト州キ
トウェで、7人兄弟の6番目に生まれ
ました。現在は結婚し、3人の子供が
います。ザンビア大学で学士号を取得
した後、2009年に北海道大学大学院
獣医学研究科に入学し、2013年9月
に博士号を取得しました。博士号を取
得する前には、北海道大学で人獣共
通感染症管理の認定コースも修了しま
した。

私が日本に来た理由は、主に好奇
心からでした。異文化体験を求めてい
たのです。日本文化や日本の武道であ
る空手に興味を持っていましたので、
日本に来る前から空手の基礎修練を
していました。その時の流派は、来日
以降に私が打ち込むことになる極真
空手とは違っていました。現在はザ
ンビア大学で講師・研究職に就きな
がら、市内の道場で極真空手の師範

として活動しています。

卒業後、私はSATREPS^{サトレップス}やJICA^{ジャイカ}
(国際協力機構)のプロジェクトで、北
海道大学人獣共通感染症リサーチセ
ンターの澤洋文教授と緊密に共同研
究を行ってきました。また、長崎大学
の熱帯医学・グローバルヘルス研究科
(TMGH)に3か月滞在し、公衆衛生
と世界疫学のコースに参加したこと
もあります。直近では2019年秋から冬
にかけて、北海道大学に3か月滞在
しました。私の日本滞在は全てJST(科
学技術振興機構)とJICAからの支援
によるもので、深く感謝しています。

北海道大学は非常に素晴らしい名
門大学です。また、キャンパスは広大
で春は特に美しいです。最先端の研
究を生み出しており、誰もが新しい革
新的な研究に取り組むことができる非
常に魅力的な場所です。私が北海道
大学で勉学に励んでいた時に経験し
たことを、今後、多くのザンビア人
が経験できるよう、ザンビアで北海道

学への留学を推奨し続けていきたい
と思います。

札幌と私が住むルサカはまったく
環境が異なっています。ルサカでは
雪は降りませんが、暑い雨季(10月か
ら4月)と寒い乾季(5月から9月)の
2つの季節があります。また、人口は
ほぼ同じですが、ルサカの面積は418
km²で、1,212km²ある札幌の方が大き
いです。

最後に、ザンビアから、この多様性
にあふれた北海道大学コミュニティの
一員であることの喜びをこめてご挨拶
申し上げます。北海道大学の益々の発
展を祈っています。

* 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム
(Science and Technology Research Partnership
for Sustainable Development: サトレップス)。国立
研究開発法人科学技術振興機構(JST)、国立研究開
発法人日本医療研究開発機構(AMED)及び独立行
政法人国際協力機構(JICA)が共同で実施している。
開発途上国の研究者が共同研究を行う3〜5年間の研
究プログラム。

北海道大学パートナーに選ばれ、
心から名誉に感じています。指
導教員である船水尚行先生に深く感
謝します。私は北海道大学の素晴らし
さを伝えるため、様々な学問的背景を
持つ若い学生に向けてスピーチをし、
私の留学経験やガザに戻ってからの
足跡(軌跡)について話しています。

私はガザ出身のパレスチナ人です。
両親、6人姉妹、3人兄弟の11人家族
の一員として育ちました。2012年にガ
ザ・イスラーム大学^{イーキューフ}を卒業後、2013年
4月に来日しe3*プログラムに入学、
2015年に環境工学の修士号を取得し
ました。在学中には様々な学外活動
を楽しみ、外国人学生や日本人学生と
の交流を深めることができました。e3
社会活動の財務マネージャーを1年間
務めたことは、多くの留学生との友情
を築き、異なる文化や背景を持つ人々
と交流する貴重な機会となりました。
北海道大学での生活は、本当に家庭
のように暖かく感じました。

私は今、国際協力機構(JICA)のパ

レスチナ事務所で働いています。ガザ
で環境プロジェクトをリードするにあ
たり、北海道大学で得た知識と技術
が大きく役立っていますので、多くの
才能あるパレスチナ人達もまた、北海
道大学で学ぶという素晴らしいチャン
スが得られるよう、その支援をこれか
らも続けていくつもりです。

北海道大学での教育は、「自分の
人生の方向性をコントロールして実現
する力」を与えてくれました。環境工学
の修士号を持つ私はガザでは珍しく、
私には耐えられないだろうと多くの人
が思うような職場環境で働いてきまし
た。私の最初の大きな使命は、JICA
のパレスチナ事務所で「ガザの医療
廃棄物管理プロジェクト」を主導する
ことで、私はこのプロジェクトで働く唯
一の女性でした。これからは、ガザの
労働市場におけるステレオタイプな女
性像を変え、女性が社会をリードでき
ることを示したいと思っています。

北海道大学は壮大な自然を持った
魅力的な場所です。世界で最も混雑し

ている場所の1つといわれるガザから
やってきた私は、北海道に着いて、そ
の自然に魅了されました。札幌は第
二の故郷だと心から思っています。

ガザと札幌には大きな違いがありま
す。まず、ガザは半乾燥地帯で雪は降
りませんが、札幌の冬は本当に寒く雪
が多いです。札幌雪まつりを楽しめた
ことは得難い経験でした。また、ガザ
が地中海沿岸にある平地で最高点は
海拔わずか105メートルなのに対して、
札幌は多くの山と川に囲まれています。
さらに、ガザでもおいしいシーフ
ードを味わうことはできません。生の魚
は食べません。札幌の寿司は格別の
味です。

最後に、「学び」こそが私たちが備
えるべき武器であると信じています。
パレスチナの大学と北海道大学との
結びつきを通じて、多くの可能性を共
に見出していきましょう。

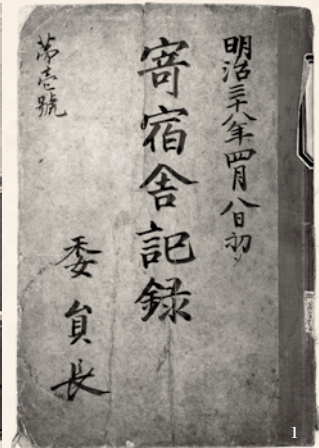
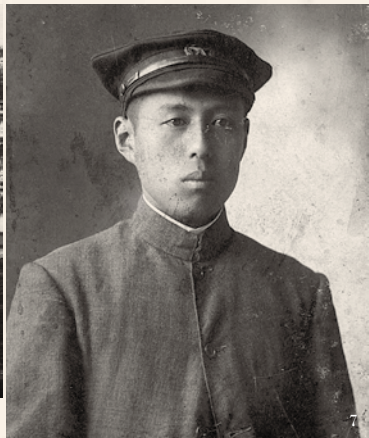
* English Engineering Education Programの略
称。工学院に設置されている「英語特別コース」で、
日本を含め43ヶ国から203名の学生が在籍(2019年現
在)している。



1. ザンビア大学獣医学部外観
2. 第40回オープントーナメント北海道空手道選手
権大会(2013年9月)
3. 昇段試験に合格した道場の門下生を祝って
4. ジンバブエ人の共同研究者と共に北海道大学
人獣共通感染症リサーチセンター研究室にて



1. 夕暮れのガザ・ビーチ
(写真提供: ラシッド・アル=ヘロウ、ガザ市観光記録省)
2. ガザ・イスラーム大学の卒業式
(写真提供: ガザ・イスラーム大学、パレスチナ)
3. 日本起業体験ワークショップで日本への留学体
験を語る
4. e3プログラム在籍中、鉾山へのフィールドトリップ
にて



挑戦の140年

温故知新 北海道大学

SCENE-12

1899-1907

「恵迪」寮の誕生

1. 寄宿舎生による舎務日誌「寄宿舎記録 第巻号 明治三十八年四月八日初メ」表紙 (1905年、大学文書館蔵)
2. 恵迪寮第18号室の室内 (1905年、大学文書館蔵)
3. 寮歌「一带ゆるき」の作者田中義麿 (1907年、大学文書館蔵)
4. 「寄宿舎記録 第巻号」1905年10月9日件に記載の寄宿舎部屋割り (大学文書館蔵)
5. 新寄宿舎の玄関前にて入舎生の記念撮影 (1906年、大学文書館蔵)
6. 寮生を中心としたカーライル研究会の開催を記念し寮の前で撮影 (1907年、大学文書館蔵)
7. 寮歌「一带ゆるき」の作曲者高松正信 (1907年ころ、大学文書館蔵)
8. 南西側から見た恵迪寮 (1908年、大学文書館蔵)
9. 印刷して舎生一同に配った寮歌「一带ゆるき」の楽譜・歌詞謄写版 (「寄宿舎庶務記録 明治三十九年六月」1907年4月4日件、大学文書館蔵)
10. 田中義麿日記「未央手記 II」1907年3月31日件 (大学文書館蔵) 新居敦二郎助教授から「恵迪」等の提示を受けている

Hokkaido University HISTORY 1899-1907	
1899年 2月	- 札幌農学校の北8条キャンパスへの移転決定
6月	- 北8条キャンパス新校舎新築工事起工式
9月	- 寄宿舎の自治制度を開始
1903年 7月	- 農学校が北8条キャンパスに移転、旧寄宿舎閉鎖
11月	- 新寄宿舎新築
1905年 4月	- 新寄宿舎開舎式
1906年 4月	- 開舎一周年記念式 (寮祭の始まり)
1907年 1月	- 寄宿舎の寮名・寮歌募集開始
4月	- 「恵迪寮」と命名、最初の寮歌「一带ゆるき」発表
9月	- 札幌農学校が東北帝国大学農科大学として帝国大学に昇格

大学文書館 だいがくぶんしよかん Hokkaido University Archives
 北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

寮名は、札幌農学校予科漢文担当の助教授新居敦二郎から漢籍に基づく四案(猶興、有隣、有恒、恵迪)の提示を受けた。その中から寄宿舎の選考委員会が「恵迪寮」と決定した。中国の古典『書経』の一節「恵迪吉従逆凶」(恵に恵へば吉にして、逆に従へば凶なり)からの引用である。「正しい道に従えば良い結果が得られる」を意味する。寮歌の作歌には三件の応募があった。その

寮名・寮歌の決定

ギテ寮歌ノ改作ニ従事ス。
 午後、再大久保君ト会シ寮歌ノ修正ニ従ヒ、漸クニシテ成ル。
 夜、音楽室ニ於テ寮歌ノ譜ノ制定ニ就キ、高松、早川ノ諸君ト相計ル。
 四月四日 高松君等ノ尽力ニヨリ寮歌ノ楽譜成ル(昨日作リタルモノハ反对者多カリシ為、全ク改変セリ)。
 午後、早川君ト寮歌(并ニ譜)ヲ謄写版印刷ニ附シ、舎生一同ニ配布ス。

一带ゆるき石狩の／源遠く霞罩め／五彩を染むる夕
 吹く風に秋闌けて／黄葉散りしく牧場千里／満野の

中から田中義麿の作歌を軸とし選考委員会メンバーで推敲に当たった。田中の日記は侃々諤々の議論が沸騰した様子を記録している。作曲についても同様で、一旦成った楽譜も大幅改変を余儀なくされている。「一带ゆるき」で始まる恵迪寮最初の寮歌は、田中義麿作歌、作曲は高松正信(本科四年)として知られるが、実際には大久保敬(本科二年)と島海二郎(本科三年)が歌詞推敲に携わり、早川直瀬(予修科一年)が作曲に力を貸し、前年九月に卒業して農学校助教授に就任したばかりの大竹温孝も助力している。

札幌農学校寄宿舎は、この時期、自治を開始し、新建物への引越し、寮名命名と最初の寮歌選定を行なった。札幌農学校自体も東北帝国大学農科大学として帝国大学昇格を果たす。新しい「恵迪寮」を舞台に、寮生たちは寮文化を紡いでいくことになる。現在、寮歌「一带ゆるき」は恵迪寮生が歌い継ぎ、建物は「北海道開拓の村」(札幌市厚別区)が展示をしている。

札幌農学校寄宿舎の移転

札幌農学校は、札幌市街の北一条近辺にあったキャンパスを、農学校の農場施設が広がる北八条周辺へと移転することとなった。一八九九年に新キャンパスで校舎新築工事起工式を行ない、一九〇三年七月には新校舎が落成し、キャンパス移転を実施した。それに伴い、北一条の札幌農学校寄宿舎は一九〇三年七月に閉鎖となり、同年十一月に新キャンパス内、現在の教育学部と文学部の建物あたり(北十一条西七丁目付近)に新寄宿舎建物を新築し、一九〇五年四月に開舎式を実施した。

木造二階建て「ロ」の字型の新寄宿舎建物は、西向きに玄関があり、玄関の脇に舎監室・応接室・宿直室、玄関に面する東側は食堂と炊事場となっていた。南・北に面した建物部分はそれぞれ南寮・北寮と呼ばれ、廊下に面して一、二階に九室ずつあり、寄宿舎係室・炊務委員室・閲覧室・集会室を除く、計三十二室が居室であった。舎生定員は百三十二名である。当時の寄宿舎生は、「設備完全舎内清潔及秩序の立って居る事等は云ふ迄もなく、実習をなすに便利な事、図書館の利用、運動の便等一々功能書を書いたら薬の功能書よりもっと立派なものであらう」(『文武会々報』第四十五号、一九〇五年五月)と新寄宿舎を絶賛している。以前の寄宿舎生は基本的に本科生に限っていたが、新寄宿舎は本科に加え予修科・土木工学・林学科の学生も収容可能となった。

一九〇七年一月には寄宿舎内で寮名・寮歌の募集することとなった。寮名・寮歌の選考経過を、当時の寄宿舎運営の中心人物であった田中義麿(本科二年)の日記か

照は／手稲の夏の栄にして／そこに無限の恩寵あり／是吾校の在る処／／胡沙
 吹雪叱咤する／エルムの姿壮なれや／そこに無限の偉力あり／是吾寮の在る処

田中義麿の日記

三月二十六日 応募寮歌及寮名ノ披露ヲナシ、多数決ニヨリテ委員附托ニ決ス。
 三月三十一日 午後、新居湘香先生ヲ訪ヒテ、吾寄宿舎ニ附クベキ名称ヲ請ヒテ、四種ヲ得タリ。即下ノ如シ。
 猶興(雖無文猶興)
 有隣(徳不孤必有隣)
 有恒(有恒難哉)
 恵迪(恵迪吉)
 夜、試ニ寮歌一篇七節ヲ草ス。数時ヲ費シテ僅ニ成ル。
 四月二日 夜、寮歌及寮名選定委員会ヲ開ク。少シク遅レテ大竹君モ出席ス。寮名ハ種々討議ノ末、猶興及恵迪ノ中一ヲ撰ブベキコトニ一致セシモ、二者ノ撰択ニ就キテハ異論紛々、容易ニ帰着セザリシガ、遂猶興ナル文字ハ目下中央政界ノ一団体ノ名称タルノ故ヲ以テ之ヲステ、
 「恵迪寮」ノ名ヲ用フルコトニ決定ス。
 寮歌ニ至リテ更ニ困難ニシテ、三篇ノ応募寮歌中ヨリ予ノ起草セシモノヲ採リ、之ヲ骨子トシテ多少ノ修正ヲ加フルコトトセシガ、沈案苦吟、佳句ヲ獲ルコト真珠ヲ探ルヨリモ難ク、一節一時ヲ費シテ尚成ラズ、大竹君ハ時晩ケレバトシテ辞去リ、高松、早川二子ハ楽譜ノ撰定ニ着手セントテ去リ、残ルモノハ大久保、島海及予ノ三子ノミ。鼎坐シテ互ニ相見黙々トシテ容易ニ語ラズ。時空シク移リ、未だ完璧ヲ成サルニ既ニ二十時ヲ過グ。乃之ヲ明日ニ譲リテ会ヲ散ス。
 四月三日 午前、大久保君ト昨夜ノ後ヲ継

01

「北海道大学起業家育成基金」を創設

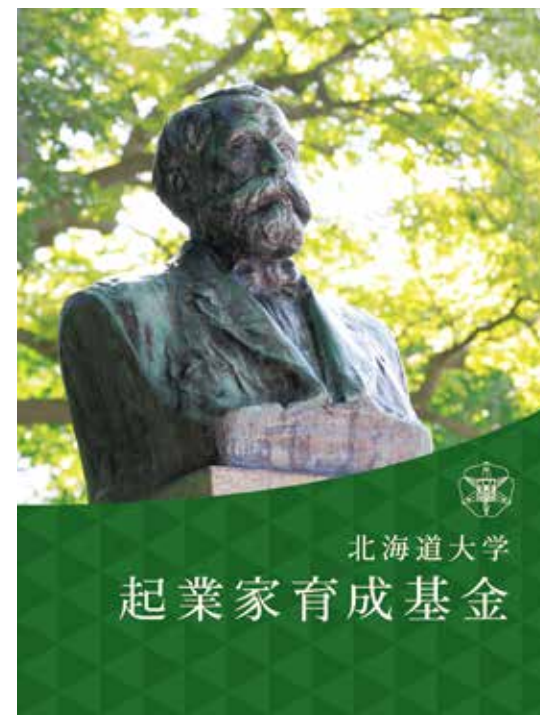
産学・地域協働推進機構は、12月2日、アントレプレナー教育を一層充実させるため、「北大フロンティア基金」の一つとして新たに「北海道大学起業家育成基金」を創設しました。設立発起人は、金子純一副機構長のほか、本学OBであり、若手アントレプレナーの育成と支援を積極的に行っている株式会社セラフ（東京）の土屋努会長など、7名からなります。

本学は、2017年度に文部科学省「次世代アントレプレナー育成事業（EDGE-NEXT）」で採択されたプログラム（主幹機関…東北大学）に協働機関として参画してお

ります。プログラム実施の中で、フィンランド発祥の企業課題解決プログラム「DEMOLA」を日本で初めて導入したほか、世界最大規模の起業コンテストであるEUREPINE（2019年）では、本学の学生チームが日本の大学として初めて国際予選で優勝するという快挙を成し遂げており、今後も継続して起業家精神を持つ人材を育成すべく、本基金の創設にいたしました。

本基金で得た資金は、アントレプレナー教育の充実や北大発ベンチャー支援のために活用いたします。

皆様のご支援・ご協力を心よりお待ちしております。



北海道大学起業家育成基金



お問合せ先：北海道大学研究推進部産学連携課
TEL：011-706-9196 E-mail：sangaku@research.hokudai.ac.jp

北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部 共同獣医学課程が 欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)の 認証を取得



2019年12月13日 文部科学省でのEAEVE認証取得の会見会場にて
左から笠原北海道大学総長職務代理、奥田帯広畜産大学長、岡 山口大学長、佐野鹿児島大学長

北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程の獣医学教育が、2019年12月11日、欧州獣医学教育機関協会(EAEVE: European Association of Establishments for Veterinary Education)による認証を取得しました。EAEVEによる獣医学教育の評価は、国際的機関による第三者評価と位置づけられるものであり、その認証は、実施する獣医学教育が欧州水準にあり、国際通用性を有することを意味しています。

北海道大学は伴侶動物臨床、感染症及びライフサイエンス、帯広畜産大学は産業動物臨床及び食品衛生の分野を強みとしており、これらを相互提供することでスケールメリットを生み出し、単独では実施できない獣医学教育を実施しています。この相互補完的な教育体制は、国内のみならず欧州諸大学が注目する取組です。

今後、国際通用性のある獣医学教育のさらなる改善のために連携するとともに、認証取得の過程で得た経験と知識を還元し、我が国の獣医学教育の国際化を推進してまいります。



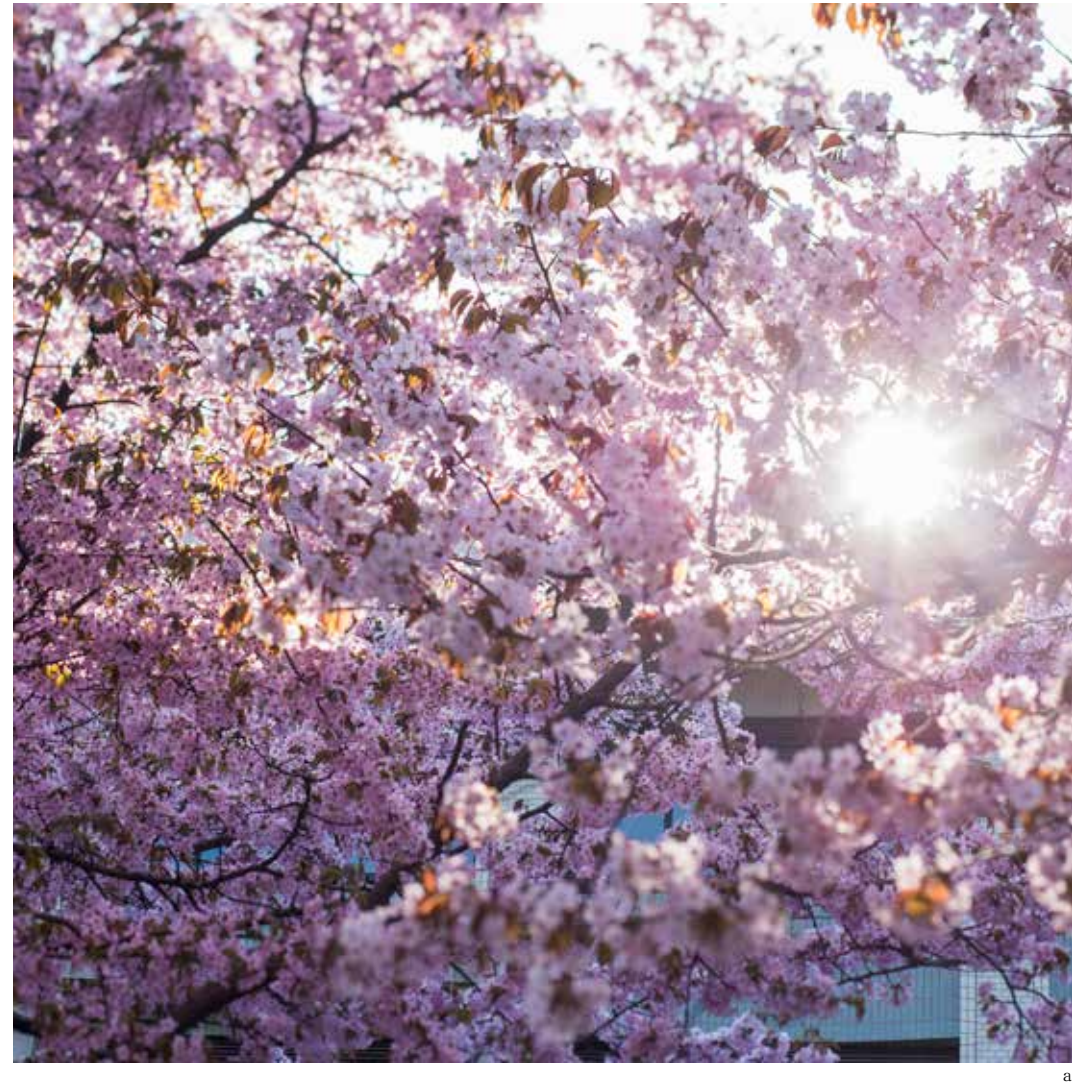
欧州各国の獣医師ら8名により実施されたEAEVE認証取得の本審査(2019年7月 北海道大学)

上：集合写真(2列目中央：長谷川北海道大学理事・副学長、2列目右から4番目：堀内同大学獣医学部長)

左：スキルスラボ(実験室)を視察する審査員

春
の
訪
れ

撮影／山本 顕史



a



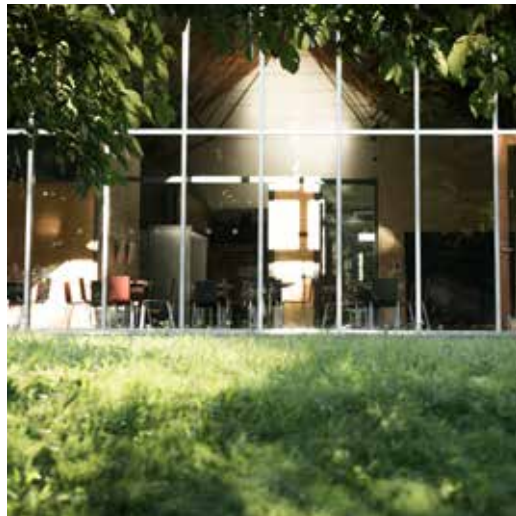
b



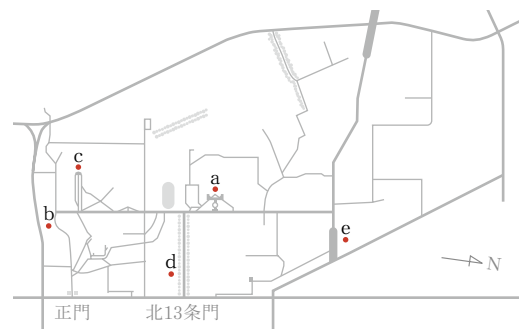
c



d



e



- a. 工学部
- b. 生協会館
- c. 農学部
- d. 薬学部
- e. 遠友学舎

雪解けが進み春の訪れを感じる3月。今年も多くの学生が社会へと旅立ちます。

今号の特集記事では「国際インターシップ」を取り上げ、多くの卒業生が後輩の育成にご尽力されていることを改めて実感いたしました。新たな一歩を踏み出した卒業生の皆様方も、北海道大学コミュニティの一員として時には先輩達からのご支援を受け、今後社会でご活躍されることでしょう。

4月からは新入生を迎え、自然豊かなキャンパスの新たな1ページがスタートします。